

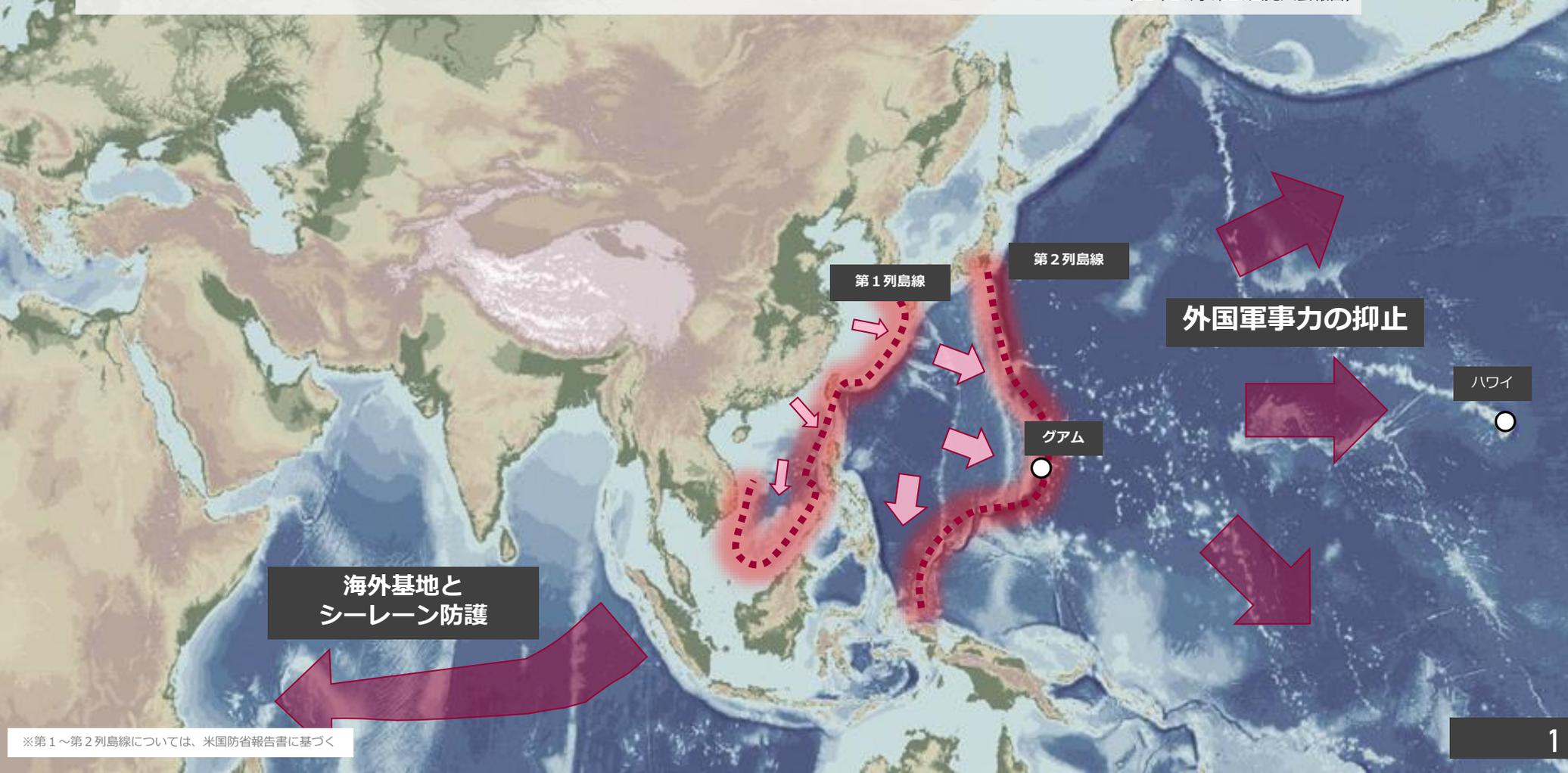
昨今の安全保障環境（国際情勢等）について

2026年3月
防衛省

中国の戦略・作戦構想

「中華民族の偉大な復興」を実現するため、中国軍を世界一流の軍隊に築き上げることを目標とする。

現在、世界は百年に一度の大きな変動の速度が増し、新たな科学技術革命と産業革命が一段と進み、世界の力関係が多く転換し、我が国の発展は新たな戦略的チャンスを迎えている。(22年10月 第20回党大会報告)



※第1～第2列島線については、米国防省報告書に基づく

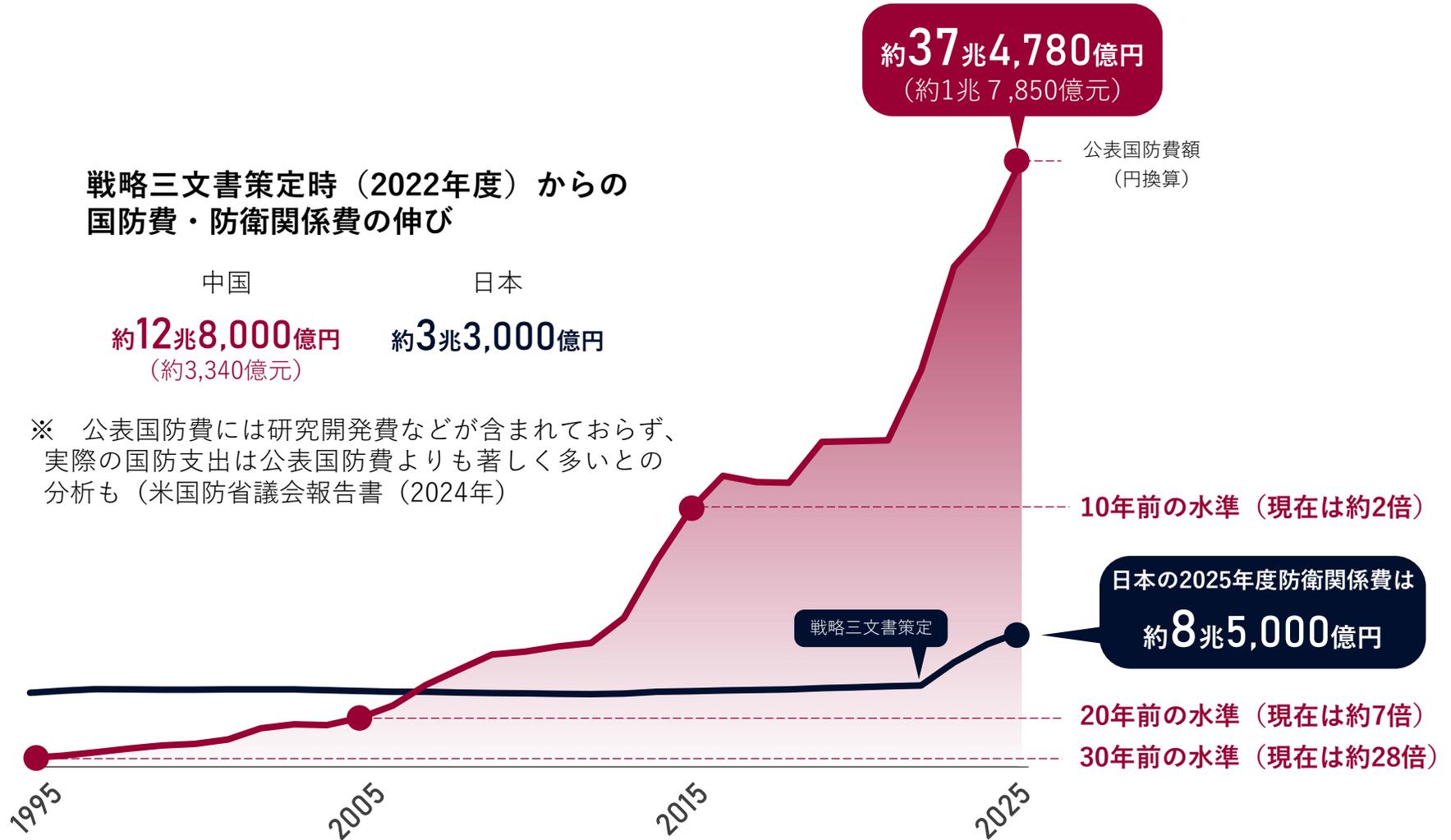
中国の国防費の増加

急速な軍事力の強化の背景に、国防費の**高い水準**での増加。

戦略三文書策定時（2022年度）からの 国防費・防衛関係費の伸び

中国	日本
約 12兆8,000億円 (約3,340億元)	約 3兆3,000億円

※ 公表国防費には研究開発費などが含まれておらず、実際の国防支出は公表国防費よりも著しく多いとの分析も（米国防省議会報告書（2024年））

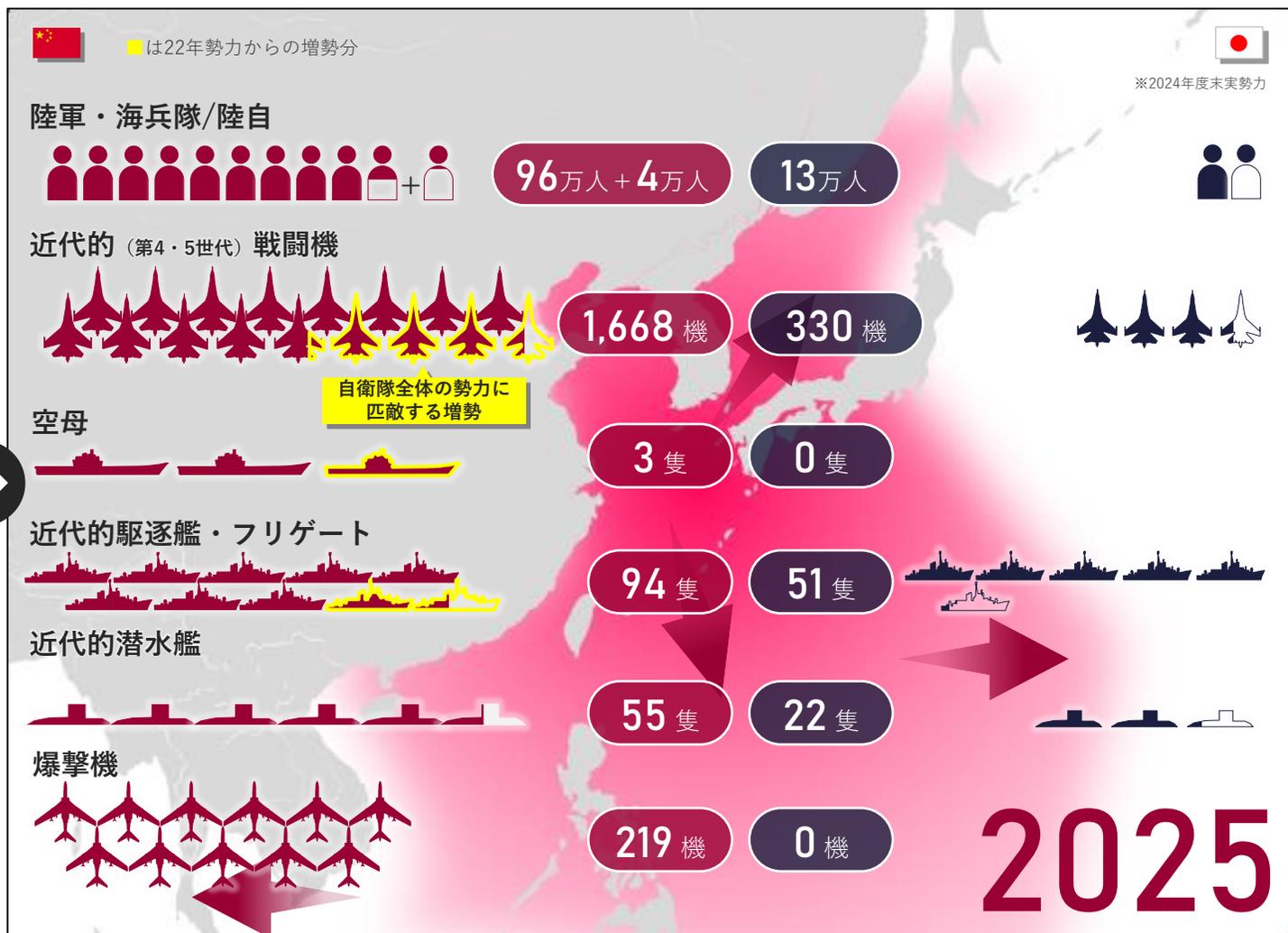
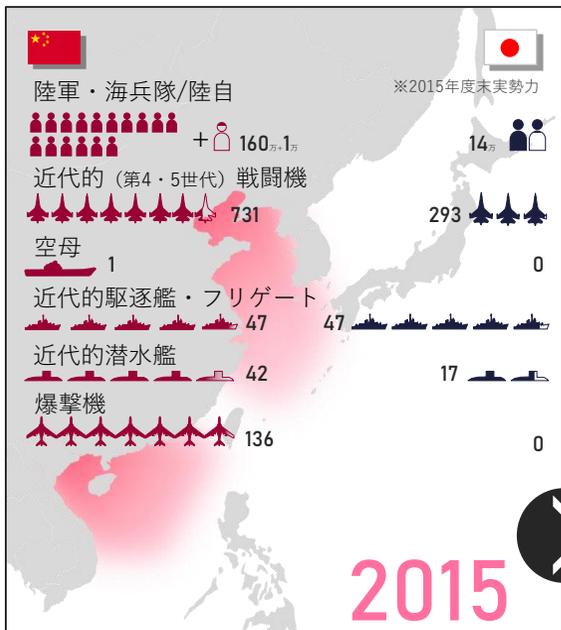


(注) 「国防費」は、「中央一般公共予算支出」（2014年以前は「中央財政支出」と呼ばれたもの）における「国防予算」額。「伸び率」は、対前年度当初予算費。
16年度および18～25年度は「中央一般公共予算支出」の一部である「中央本級支出」における国防予算のみが公表されたため、その数値を「国防費」として使用。
※1 日本の防衛関係費（予算：約8兆4,748億円）は、SACO関係経費、米軍再編関係経費のうち地元負担軽減分に係る経費等を除いたもの。
※2 円換算は各年度の出納官吏レートで計算。前年度比の数値は中国公表値による。

軍事力強化と活動の拡大・活発化

海上・航空戦力や核・ミサイル戦力を中心とした**軍事力を広範かつ急速に強化**。
 海空域での活動を急速に**拡大・活発化**。一方的な活動のエスカレーションも。

日中の勢力比較及び中国軍の活動範囲(イメージ)(2015→2025)



Topic 1 空母の硫黄島以東での活動(25年6月)

Topic 2 台湾周辺での大規模な軍事演習を含む活動の活発化(22年～)

Topic 3 無人機の太平洋側での頻繁な活動(21年～)

(参考) 米軍勢力(2025)※インド太平洋地域以外も含む

陸軍 45万人 海兵隊 17万人 近代的戦闘機 2,204機

空母 11隻

巡洋艦・駆逐艦等 111隻

潜水艦 66隻

爆撃機 120機

(注) 資料は、ミリタリーバランス(2025)、Janes Fighting Ships 2024-2025などによる。

中国の南シナ海での活動

南シナ海においても、力による一方的な現状変更の試みを継続・強化。
資源やエネルギーの多くを海上輸送で輸入している我が国にとっても重大な関心事項。

西沙諸島 領有権を中国、台湾、ベトナムが主張
1974年、中国が全域支配

✓爆撃機などの軍事アセットの展開

最近では、25年5月にウッディー島にH-6爆撃機が展開したとの指摘

南沙諸島 7地形などの領有権を中国、台湾、ベトナム、
フィリピンなどが主張

✓7地形において急速かつ 大規模な埋立てを実施

日本のシーレーン
(イメージ)



✓フィリピンを含む沿岸国への危険な行動



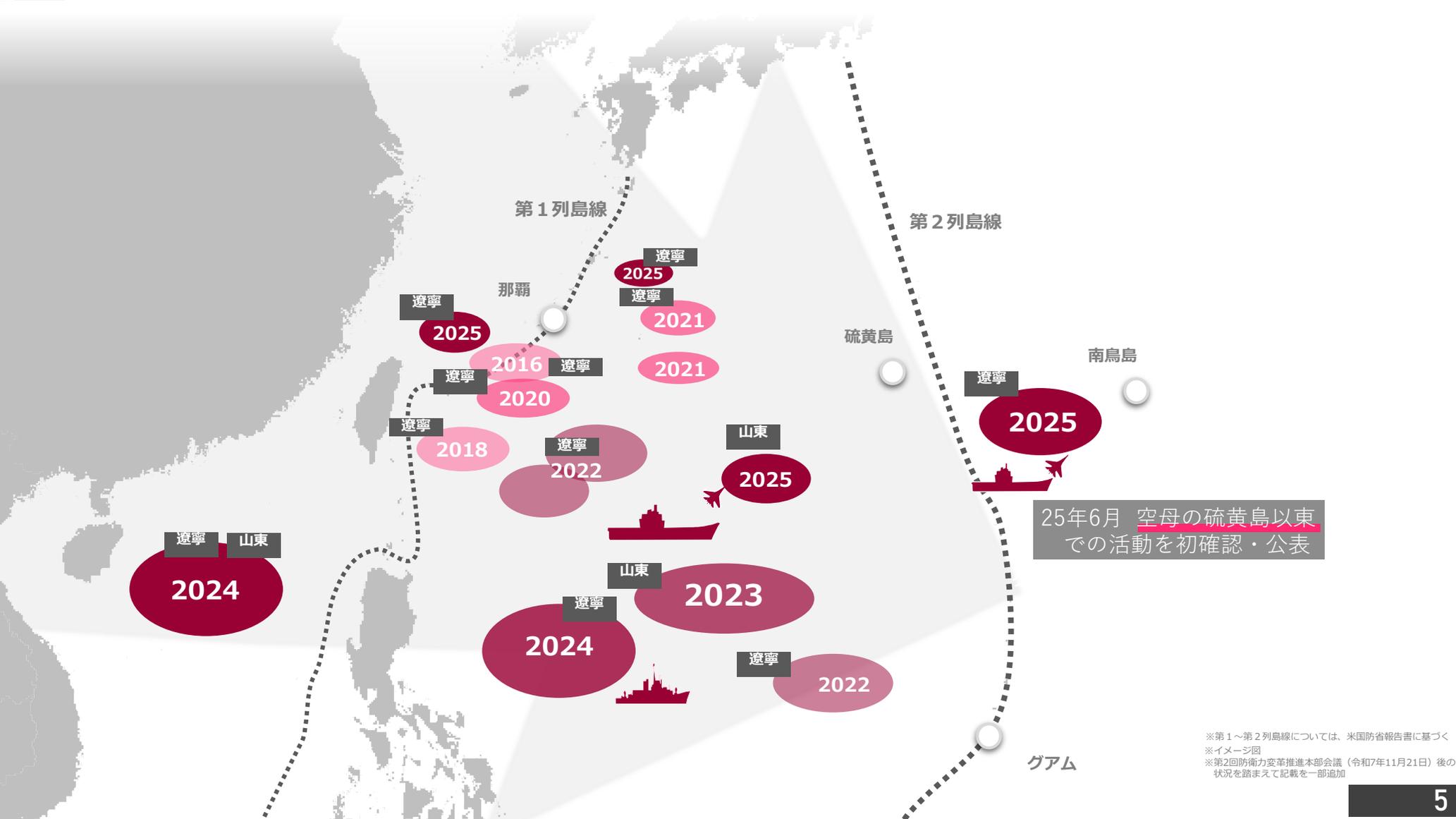
妨害活動は2022年頃から確認され、2023年以降増加。

衝突を含む危険な操船や放水と
いった妨害活動により、人的・物的被害が発生

サビナ礁付近においてフィリピン海警船に衝突
する中国海警船 (24年8月)

中国軍空母の太平洋への進出

中国はいわゆる「第一列島線」を超え、「第二列島線」に及ぶ我が国周辺全体での活動を活発化。
中国軍は、太平洋における運用能力を着々と向上させている。



※第1～第2列島線については、米国防省報告書に基づく
※イメージ図
※第2回防衛力変革推進本部会議（令和7年11月21日）後の
状況を踏まえて記載を一部追加

北朝鮮の弾道ミサイル開発動向

現行の三文書策定以降も、核・ミサイル開発に邁進。新たな弾道ミサイルも登場。自らの優先課題に沿って開発・試験を着実に実施し、関連技術等を向上。

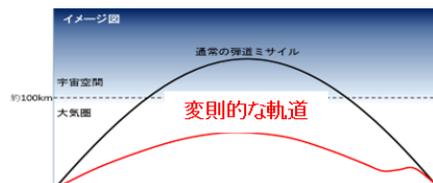
01 短距離弾道ミサイルの実戦使用

ウクライナに対する実戦使用を通じ、短距離弾道ミサイルの能力を検証。更なる能力向上を企図。



02 BMD突破のための極超音速兵器開発

新たな「極超音速ミサイル」を発射。ミサイル防衛網の突破を企図し、引き続き開発や能力向上を追求。



03 対米抑止のための長射程ミサイル開発

複数の固体式 I C B M 級が登場。再突入技術検証のための試験発射は未実施なるも、射程は米国全土を収める。



- 北朝鮮のミサイル防衛突破能力が向上。我が国の弾道ミサイル防衛がますます困難に。
- 北朝鮮が対米抑止力を十分に確保したと一方的に認識した場合、地域における北朝鮮による挑発行為が一層増加・重大化するおそれ。

北朝鮮による核開発の現状

核兵器の小型化・弾頭化を実現し、我が国を射程に収める弾道ミサイルに搭載可能。
また、核兵器開発のため、核分裂性物質の生産も拡充。

01 核兵器の小型化・弾頭化

過去6回の核実験を実施し、
核兵器の小型化・弾頭化を既に見てきた。

03 核分裂性物質の生産拡充

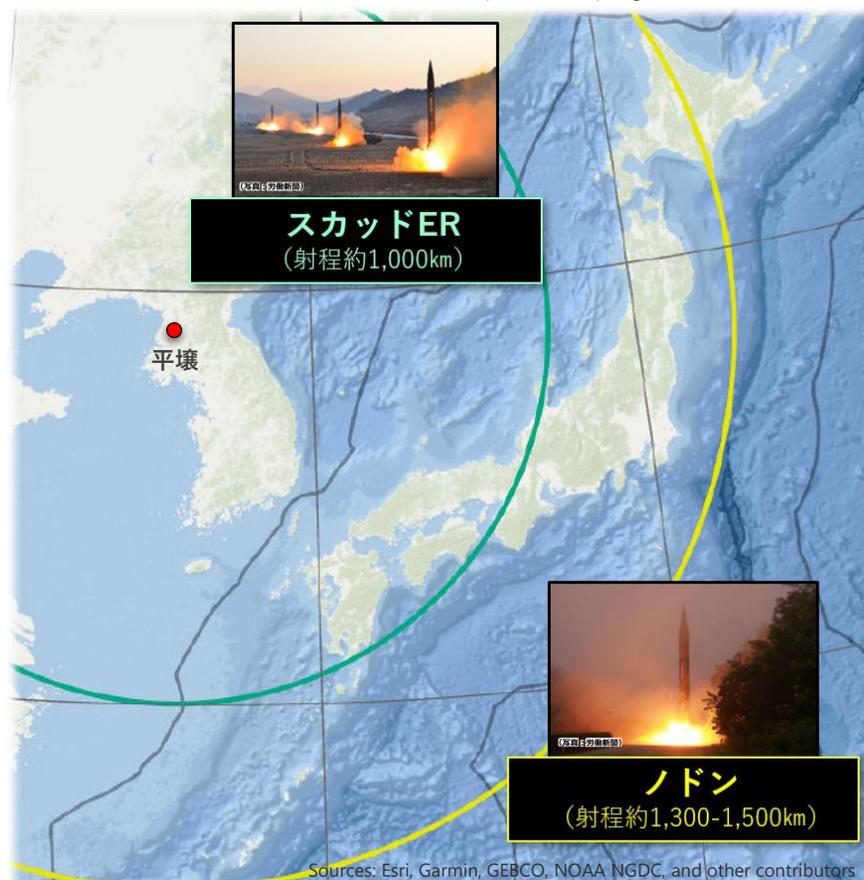


【北朝鮮が公開したウラン濃縮施設】

北朝鮮は兵器級ウランなどを継続的に生産。
約50発の核弾頭を保有していると指摘されている。
金正恩委員長は、核兵器開発のための濃縮ウランの
更なる増産を指示。

02 我が国は核攻撃の射程圏内

北朝鮮は、我が国に対する核兵器の投射手段として、
ノドンやスカッドERなどを使用可能。



※ 便宜上平壤を中心に、弾道ミサイルの到達可能距離をイメージとして示したもの。

極東方面・北方領土におけるロシアの軍備強化

ウクライナ侵略を継続するなかでも、ロシアは北方領土を含む極東での軍備強化を継続。
核戦力を含む相当規模の戦力が存在するほか、**新型装備への更新が進展。**



ロシアの活発な軍事活動の継続

ロシアは我が国周辺での活発な軍事活動を継続。戦略核戦力によるミサイル演習を継続するほか、欧州方面では無人機の活動が活発化しており、欧州諸国は防空態勢強化を強いられている状況。

欧州方面での無人機の活動の活発化

25年9月、国籍不明無人機がノルウェー・デンマークの空港周辺で目撃され、**空港が一時閉鎖**

22年10月、23年10月、24年10月、25年10月、**戦略核戦力**によるミサイル演習を実施

我が国周辺での活発な軍事活動を継続

24年9月、ロシア軍機が**1日に3度**にわたり北海道北方で**領空侵犯**
※空自機は**初めてフレア**により警告

戦略核戦力によるミサイル演習を継続的に実施



ICBM「ヤルス」



SLBM「シネヴァ」



Tu-95戦略爆撃機

25年9月、ロシア無人機×19機がポーランド**領空侵犯**

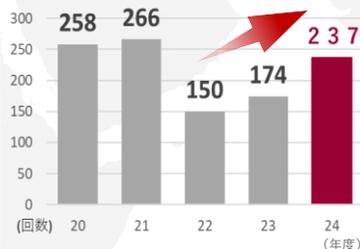
25年9月、ロシア無人機がルーマニア**領空侵犯**

25年11月、国籍不明無人機がベルギーの空港周辺で目撃され、**空港が一時閉鎖**

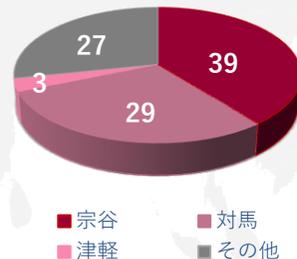


ポーランドで発見された無人機

✓ ロシア機に対する緊急発進回数推移



✓ ロシア海軍艦艇の海峡通過隻数(24年度公表分)



中露**共同航行・共同飛行**を毎年実施
※図示は21年及び23年の共同航行、24年11月の共同飛行

両国主催の**軍事演習への相互参加**を継続
※図示は24年9月の「オケアン2024」「北部連合2024」の例

中露海軍は**共同演習「海上協力」**をほぼ毎年実施
※図示は25年の例

※それぞれの活動地域などはイメージ

ウクライナ侵略で見られる新しい戦い方の例① | 無人アセットの大量運用・用途拡大

無人アセットにより、相手方に新たな対応コストを賦課。



ロシア軍のUAVにより破壊されたハルキウ市の集合住宅

01 無人アセットの大量運用

- 安価で短期間に大量生産できる無人アセットが戦場の主役に。ロシアは弾道・巡航ミサイルと大量の無人機を組み合わせた大規模攻撃を都市にも実施。



シャヘド型無人機
単価3.5万ドル



巡航ミサイル「カリブル」
100万ドル

約30倍の値段

02 無人アセットの用途拡大

- ウクライナの戦場では、偵察・観測、長距離攻撃、前線における精密攻撃など、無人アセットの用途が急速に拡大。従来の装備品と無人アセットを組み合わせることが重要。
- 運用方法や用途の異なる多様な無人アセットを導入し、戦況に応じて運用できるかがカギ。



FPV（一人称視点）ドローンと操作する様子

- ✓ 敵塹壕陣地や装甲車両等に対する攻撃



「蜘蛛の巣」作戦

- ✓ 敵国内で奇襲効果を最大限活用



ウクライナ無人水上艇
「MAGURA V」



- ✓ ロシア艦艇を複数撃沈
- ✓ 対空ミサイルでヘリや戦闘機を撃墜

ウクライナ侵略で見られる新しい戦い方の例② | 宇宙・サイバー・電磁波領域、情報戦【1/2】

宇宙・サイバー・電磁波領域における戦いや情報戦も継続的に展開。

01 宇宙領域の更なる活用

- 米民間企業の通信衛星コンステレーション「スターリンク」などの民間衛星が戦場における通信・情報優位を左右。ウクライナは迅速な攻撃が可能に。
- 今後、戦時における民間衛星の利用が当たり前の時代に。

02 開戦前から行われるサイバー攻撃と常態化

- ウクライナでは、地上侵攻前から多数のサイバー攻撃が発生し、重要インフラや衛星通信網が標的に。ウクライナはサイバーセキュリティ強化に係る自国の取組みに加えて、欧米諸国の官民の協力を得て、常態化するサイバー攻撃に対処。
- サイバー領域における継続的な能力構築と国際連携が不可欠に。

◆ウクライナ周辺を多数の「スターリンク」衛星が飛行



「スターリンク」の地上局を展開



常に多数の「スターリンク」衛星が飛翔することで安定した通信を利用可能

◆ サイバー領域における西側諸国による主な支援内容

西側諸国による
主な支援内容

- ✓ 要員派遣
- ✓ クラウド移行
- ✓ モノの無償提供

- ✓ 能力構築
- ✓ 脅威情報の共有
- ✓ サービスの無償提供

◆ウクライナ当局が特定したサイバー攻撃事案数の推移



宇宙・サイバー・電磁波領域における戦いや情報戦も継続的に展開。

03 電子戦の活発化

- 衛星測位システムを使用した精密攻撃や無人機に対抗するため、**電子戦兵器の活用が活発化**。電子戦をめぐる技術革新と対抗措置の連鎖が継続。
- この連鎖に効果的にかつ迅速に対応できるかが課題。

◆ ウクライナ軍の主な装備



「KVERTUS AD COUNTER FPV BACKPACK F3U」
対FPVドローン用バックパック型妨害装置



電子戦耐性の高い
ウクライナの無人機
「ヴァンパイア」



光ファイバーFPVドローン



- ✓ 拡散されたディープフェイク動画
- ✓ ウクライナや米国に対する国際社会の信用低下を企図

- ✓ ウクライナは戦略的コミュニケーションを積極的に展開
- ✓ 逃亡したとの偽情報に対抗するためキーウの大統領府敷地で撮影した動画を公開



04 情報戦の高度化

- ロシアの**偽情報の流布をはじめとする影響工作**に対抗するため、ウクライナは**戦略的コミュニケーション**を積極的に展開。民間企業・NGOとも連携。
- ナラティブの支配は戦略的優位性をもたらすものとして機能。情報発信の透明性・迅速性とともに関民連携の重要性が明確に。